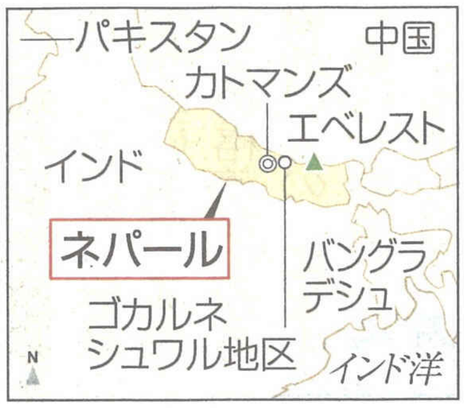
ネパールでがん予防

AMDA社会開発機構と第一三共

早期発見へ 検診や啓発活動

アジア、アフリカ、中南米の8カ国で発展途上国支援を行うAMDA社会開発機構（岡山市北区蕃山町）は今月から、製薬会社の第一三共（東京）と協働し、ネパールで乳がんと子宮頸（けい）がんの予防などに関するプロジェクトに乗り出した。検診を実施し、早期発見に努めるほか、啓発活動による知識向上、検診の受診者数増加などを目指す。同機構が、がんに特化した活動をするのは初めて。

同機構の現地スタッフと、AMDAネパール支部の医師や看護師らが中心となって、首カルネシュワル地区で活動する。地域の7診療所と同支部が関わる病院の計8カ所を拠点に、検診を行う。現地では既に地域住民の実態調査や医療従事者向けの研修をスタートした。



さらに機材を扱う専門スタッフを育て、日本の愛育委員のような保健ボランティアも育成する。期間は2023年12月までの3年間で、第一三共は資金面の援助、同様の海外支援で培ったノウハウの提供、活動の企画・運営にも携わる。

聞き取り調査に回答するネパールの人たち

世界保健機関（WHO）の統計や同機構などによると、ネパールでは女性のがん患者のうち、子宮頸がんと乳がんにかかる人が多く、がんに起因する死亡者の約3割を占める。政府の予算や人材難から定期検診制度や予防啓発活動が十分でなく、受診率も低い上、がんが見つかった段階では既に進行しているケースも少なくないという。

同機構は「これまで行ってきた感染症対策や母子保健とは異なる分野で取り組みを進め、発展途上国の健康に寄与したい」と話している。（斎藤章一朗）